

やわらかい心

倉橋惣三

前に、新年語として、新しい心について考えた。その新しい心は、いき／＼していること、さわやかなこと、あざやかなことを、先ずその特色とする。つかれている心、くもつてゐる心、にぶい心の反対である。しかも、それらと並んで新しい心をもつ特色は必ず、やわらかいことである。

不斷の新しい自然界に見たが、新しい自然界は常にやわらかい。新しい芽、新しい葉、新しい枝、それのみか、幹、根も、みな新しい。その根を抱く春の土も、その葉を撫でる春の風も、新しいとやわらかさともちぬしである。いま待ちうける早春の野は、その新しさとやわらかさに満ちてゐる。春光新たにみなぎるところ、山もやわらかく、岩もやわらかく、天地あまねくやわらかさの世界となる。

子どもの心は、自然界の新しい如く新しく、自然界のやわらかな如くやわらかい。その膚のやわらかなと共に、その筋のやわらかなと共に、その骨のやわらかなと共に、その心は、或はそれ以上にやわらかい。うい／＼しいという言葉は、古りない新しさの故のやわらかさを感じさせ、おさないという言葉は、熱しないやわらかさの故の新しさを感じさせ

る。その目の色の、なんとあざやかにやわらかなことか、その聲の音の、なんとさわやかにやわらかなことか。

春風に吹かれて、歩みの高きを恥じ、若草を踏んで、かゝとの固きをおそれ、幼児を抱いては、わが筋骨のぎごちなさを嘆き、幼児と相対しては、わが心情のかたくなさを悲しむ。せめて、どたぐつを脱いで春園に入っておきてと、希くはかたい心をほどいて幼児に接する心がけとを忘れまい。

やわらかい心は、やわらかい膚の如く感じ易い。過敏の感傷に病んではならぬけれども、鈍感不感、革皮の如く貝殻の如きは、防衛のよろいの用はしても、一切を拒んで、享受共感のこまやかさを缺く。對立抵抗に導かれることはあつても、相交り、相親しむの途にはならない。殊に、子どもの心の、すべて微妙な温かさや美しさや、貴いが常にかすかの中に漂う香りなどを到底感受し得ない。幼児に接する資格がないというよりも、幼児の方のわびしさは大きからざるを得ないであろう。そのすげなさは幼児を失望させ、そのつれなさは、幼児を悲しませずにはおこまい。健全に育てられ

た小さい心は、強いて愛せられるよりも、小さい心を受けられることを求める。その最も眞實は、謂はゞ極めて謙虛なともいえる要求が充たされないのである。子どもにとつて、こんな不幸があるか。それのみでない。受けられないままに、受けられないことが平氣になり、やがては、受けられることを求めなくなり、受けられる喜びを味わぬいから、ついに受けられることを好まなくさえならんとも限らぬ。悲惨これに過ぎることがあろうか。

やわらかい心は、まろやかにかど立たない。白眼人を射、冷語人を切るといつたようことは全く別としても、ちらりと光る目、ふと尖がる言葉は、われ識らず相手のやわらかい心に對して思いがけぬ鋭さを感じさせずにいない。更にそれが、時には目にみえないとげともなり、時には、ちくりちくりと皮肉の炎傷ともなり、幼児の心をいたゞしく惱ますことも稀であるまい。

やわらかさのみ包まれては、強くならぬということもある。子どもの心も、もとより鍛えられる必要がある。しかし、名工は、たいらに鍛え、まろく鍛える。突かない、刺さない、傷け破らない。玉を鍛えるものは玉である。かどのないまろやかな玉である。幼児の心は小さい玉である。その心を鍛えるのも玉でなければならぬ。せめて、小さい玉を傷けこぼち易い角石であつてはならない。たゞふんわりとのみ包もうというのではない。強く推し、強く抑えることさえ

もある。しかし、そこにかくれた針の小さい刺もあつてはならない。玉と玉との觸れあひは、そのまろやかな面の、かどのない、その意味で常にやわらかな觸れあひである。

固く嚴しいというのではないが、いらゞし易いわれゞの心が、如何に子どもの心を驚かすことが多いことであらう。いらゞするとは、われともなく、小さく激していることである。激しきつた心には、それとしての張りもあらうし、熱もあらうし、相手の心を引き立て、ゆく力もあらう。新しさに伴うやわらかい心は、だれた心、なまぬるい心ではない。やわらかさという、どこまでも健康な眞實な心である。それに對して、いらゞする心は、病的であり、眞實性のもてない心である。心のやわらかさをもつ眞の強さのない弱い心である。弱いが故に、小さきみな氣分に、小さく突いたり刺したり、相手の心をも、落ちつきのない弱い心にする。健康な眞實なやわらかさにある子どもの心にとつて、この位 迷わくな、また有害なものはあるまい。

やわらかな心は、こだわらない心である。流動自在、執着せず偏曲しない。頑固と偏屈の反對である。世に、こだわらないもの、幼児の心の如きはない。過ぎたきうにとらわれることもなく、自ら自分に縛られることもない。その時の新しさに新しく、自分の生長の新しさに新しい。常に、今の自分に、いきゞと生きている。悲しければ泣く、しかし、いつまでもその悲しみに沈んではいけない。腹がたゞば怒る。し

かし、いつまでも、その怒に燃えたり、くすんだりしてはいない。變轉常ならずといつてはいけない。移り氣といつてはいけない。變化に生き移動に生きるのではなく、いつも今に生きていくだけのことである。それが、ゆく水は常にかくの如しといわれた程の、動の哲理を含むものか、風竹林を吹いて後に影なしというような枯淡な禪境に比せられるものか、素よりそんなむづかしいことではあるまいが、ゆうづう無げのゆう通性に、堅くるしい硬直と、きゆうくつな停滞を知らない自由な心ではある。この心の自由に、いつも晴れ〜とした明朗性があり、あつさりしたたんぱく性がある。積つたごみで曇らされたり、粘りつくにかわでこちついたりしない。従つて、善忘という程の美德ではないとしても、濟んだことに、しつこく、こびりついていない。叱つたことを忘れないのは、おとなで、子どもは、さつき叱られたことも、すぐ忘れていく。その時その時の争いも、どづちからということもなく、さらりと忘れる。自らくやみを知らないと共に、うらみといつたものをもちつづけたりしない。むだな舊觀念にからみつかれることもなければ、餘計な先入見に支配されることもない。

心のやわらかさを妨げ、かたくするものゝある。理念、意地、こけん、皆それである。しかし、まさかに、こんな盾を立て、矛を執つて、幼い子に立ちむかうものはあるまい。幼児相手に、有意的につつばつたり、わざとかど立て

たり、いぢわるくこたわつたりすることは、めつたにあるまい。だが、自ら心しなければならぬのは、忙しい心、疲れる心、老ゆる心である。忙しさに、もみくちやにされ、疲れに皺だらけにされ、老いに硬化され、われとも識らず、枯れ、じなび、頑固になる。子どものために思い、盡し、計ることは、良く、多く、正しく、一貫するとしても、子どもは、それを感謝するよりも、心の觸れあいの、いかに、やわらかでないことに迷わくするであろう。心と心との接觸の快さはないが、しかたなく世話になり、しかたなく教育されていることもあるかも知れない。

かたくなになり勝ちな心を、常にやわらかに保つためには、どうしたらよからう。それは簡単にはいえぬ大きな修養である。しかし、われらには、世の人々が必ずしも恵まれていない事がある。それは、常にやわらかな幼児の心に常に觸れていることである。このかたくなな心、幼児には随分氣の毒のことも多からうが、こちらをやわらげられることの幸は無限といつていい。このかたい心が、とにかくも幼児と共に笑い、うたい、語り得るのは、幼児のやわらかい心にやわらげられるおかげといつていいかも知れない。この意味では、幼児保育者の心はやわらかさをもたなければならぬというよりも、幼児によつて常に心をやわらかにされているのが、幼児保育者であるこそういつた方がいゝかも知れない。